

書

評

アジアを救った近代日本史講義
渡辺利夫

幕末から、明治、大正、昭和、そして現代に至る激動の日本近代史。そこから血と涙と汗を流した日本人の魂の声が響いてくる。自虐史観ではなく、自尊と誇りの歴史観だ。



拓殖大学総長が、学生に語った講義の内容である。日本史の最も、重要な本質を、分かりやすく解説したものといえる。同時に、その歴史観とともに歩んだ拓殖大学の歴史および、その意義と役割に焦点を当てている。台湾、朝鮮、満州、東南アジア諸国、太平洋諸島へと、日本の拡大を支える手足としての人材を排出し、現地の社会、経済、文化面で貢献した。

帝国主義列強が、東アジアに”弱肉強食”の舞台を求めて乱入してきた動乱の時代。いち早く国家意識に目覚めた日本の近代国家建設の道のりは、そこから始まった。30代、40代の若き指導者達が時代の先頭に立って、西欧に追い付け、追い越せとの、ゴールに向かって、ひたすら歩み続けた。最後、米国との戦争で破れるまでの歴史は、そんな歴史であった。

まず、明治四年、倒幕運動は成功したものの、新しい国家建設は何も進まず、まだ混乱期にあるとき。岩倉使節団が、米国、欧州など、国家建設の青写真を求めて世界一周の視察に出発した。西郷隆盛を除いて、新政府の中樞がこぞって二年近くも、日本を留守にするなど、想像さえできないことであった。

岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文ら随員、留学生も含め百人余の、前代未聞の大デリゲーションであった。もちろんこんなことはか

ってどこの国の歴史にもなかった。それほど画期的なことであった。太平洋、インド洋の船上で、あるいはアメリカ大陸や欧州の列車や宿泊先で、毎日、国家百年の大計を求めて、”一大セミナー”が展開された。

「富国強兵」のスローガンのもと、明治・大正・昭和の歴史が綴られていった。国を愛し、命までも捧げた心の伝統が、築かれた。その時、お隣の国韓国は、中国清朝の支配下にあり、李朝の排他的儒教システムの下で、縛られ、腐敗と沈滞の中で全く動きが取れない状態にあった。また、後ほど清国から日本の植民地となる台湾も、「盗賊がばっこし、アヘンが蔓延、衛生状態が悪い」未開の地であった。

1894年日清戦争が勃発、日本の勝利の結果、台湾が日本領となり、日本は、他の欧米列強とは、全く違う植民地開発にとりかかった。収奪の対象にするのではなく、同化の対象として、満身の力を込めて、開発事業に取り組んだ。そのため、人材育成機関として、桂太郎（元台湾総督および陸軍大臣）を会頭とする台湾協会学校が1901年に建設された。

これが、拓殖大学の前身である。ここから韓国、台湾、満州、さらに東南アジアに出発。近代国家のインフラやシステムの導入、教育や農業改革、近代工業の建設など画期的な社会改革事業に貢献した。欧米が、植民地を収奪の対象にしたのとは、全く、対照的であった。多くの若者が、鉄道、土木技師、語学専門員、銀行員、教職員、農業指導員として、海外に雄飛したのであった。

1922年には、台湾76名、朝鮮269名、満州・支那282名のそれぞれ在住者がいた。「そうした在住者から当時寄せられた手紙がいまも、残っているが、胸を揺さぶるものがある」。

(PHP新書 945円)